

美術学部

近現代美術史・大学史研究センター
Geidai Archives Center of Modern Art

年報・紀要

令和4年度 (2022)



年報

I 組織概要	2
1.理念	2
2.業務内容	2
3.沿革	2
4.所蔵資料	3
5.組織・スタッフ	3
6.運営委員会	3
7.施設・設備	3
II 令和4年度（2022）の活動状況	4
1.組織・運営	4
1-1.美術学部近現代美術史・大学史研究センター運営委員会の開催	4
1-2.学内外からの資金獲得状況	4
2.資料の管理・公開	4
2-1.資料の受入・整理	4
2-2.資料利用者への対応	5
3.社会教育事業	6
3-1.展示の開催	6
3-2.他機関開催の展示会への出陳	8
4.普及活動	8
4-1.大学教育の担当	8
4-2.「東京美術学校在籍者一覧」（大正元年度～昭和9年度入学者）公開	9
4-3.大学史動画作成・公開	9
5.調査・研究活動	10
5-1.研究会の開催	10
5-2.研修会への参加	12
6.業務日誌	13
III 研究報告	14
浅井ふたば「大正期から昭和初期の東京美術学校—学務関連規定と修学状況を中心の一」	14
芹生春菜「資料紹介『金品寄付ニ関スル書類』アーネスト・フェノロサ顕彰「斐諾洛薩先生碑」建立に関連して」	21

年報

I 組織概要

1. 理念

東京藝術大学美術学部近現代美術史・大学史研究センターは、1887年(明治20)に設立した東京美術学校から現在の東京藝術大学美術学部に関係した記録文書、教職員・卒業生および関係者から寄贈された大学史関連資料を保管しています。これらは本学の歴史にとって貴重であるばかりか、日本の近現代美術史を研究するための重要な基礎資料でもあります。私たちは受け継がれた資料を維持管理することはもちろん、これらを活用した研究の活動拠点(センター)としての役割を果たしていきたいと考えています。

2. 業務内容

- 資料の収集、整理及び保存に関すること
資料の移管・受入、所蔵資料の整理、所蔵資料の保存環境の整備など
- 資料の利用に関すること
資料閲覧、レファレンスなど
- 資料の調査及び研究に関すること
展示、所蔵資料に関する調査、研究会・紀要への論文執筆による成果発表など
- 普及活動に関すること
ウェブページでの情報公開、公開講座の開催、東京藝術大学美術学部の歴史コンテンツ制作など

3. 沿革

1964(昭和39)年6月	美術学部紀要編集のため教育資料編纂室設置 沿革史編集委員選出
1981(昭和56)年10月	東京芸術大学百年史編集部会要項制定
1987(昭和62)年10月	『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇 第1巻』刊行
1992(平成4)年10月	『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇 第2巻』刊行
1997(平成9)年3月	『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇 第3巻』及び『上野直昭日記』(『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇 第3巻別巻』)刊行
2003(平成15)年3月	『東京芸術大学百年史 大学篇』刊行
2003(平成15)年11月	『東京芸術大学百年史 美術学部篇』刊行
2018(平成30)年7月	現在の正木記念館に移動
2020(令和2)年1月	美術学部近現代美術史・大学史研究センター設置
2022(令和4)年4月	歴史資料等保有施設に指定

4.所蔵資料

公文書等の管理に関する法律に基づき、特別な管理を行なっている歴史的若しくは文化的な資料又は学術研究用の資料を収集・保存し公開している。

区分	資料概要	数量
大学史史料	東京美術学校及び東京藝術大学美術学部の事務文書	1,425点
寄贈資料	東京藝術大学美術学部に関する個人や団体から寄贈された資料	8資料群 8,554点

※ウェブページで公開されているもの。

5.組織・スタッフ

センター長

大学美術館教授 古田亮

教員等

学術インストラクター 浅井ふたば

学術インストラクター 芹生春菜

協力研究員

AMC准教授 嘉村哲郎

6.運営委員会

「東京藝術大学美術学部近現代美術史・大学史センター内規」にもとづき、センターの運営に係る事項の審議をおこなう委員会。

2022年度運営委員名簿

委員 美術学部長・大学院美術研究科長・建築科教授 光井渉

委員 大学院美術研究科文化財保存学教授 荒井経

委員 大学美術館館長・教授 黒川廣子

委員 絵画科日本画教授 斉藤典彦

委員 芸術学科芸術学教授 佐藤道信

委員 工芸科鍛金教授 丸山智巳

委員 大学院美術研究科グローバルアートプラクティス准教授 李美那

7.施設・設備

施設総面積

年度	合計	執務	展示	閲覧	書庫
2020年	169.1㎡	86.5㎡	13.3㎡	18.2㎡	51.1㎡
2021年	169.1㎡	86.5㎡	13.3㎡	18.2㎡	51.1㎡
2022年	169.1㎡	86.5㎡	13.3㎡	18.2㎡	51.1㎡

専用書庫の機能:空調機有、温湿度計有、除湿器有、施錠有、施設出入口に消火器有、書庫耐震固定工事済。

II令和4年度(2022)の活動状況

1.組織・運営

1-1.美術学部近現代美術史・大学史研究センター運営委員会の開催

下記のとおり、運営委員会を開催した。

日時 :2022年9月22日16:00～17:00

場所 :オンライン

出席者:古田亮、光井渉、黒川廣子、斉藤典彦、佐藤道信、丸山智巳、李美那、松井真理(美術学部庶務係長)

欠席者:荒井経

議題 :協議事項 1.「美術学部近現代美術史・大学史研究センター歴史資料等利用要項」の制定について

2. 動画「東京藝術大学の歴史 東京美術学校編」の公開について

報告事項 1. 公開講座「歩いて分かる藝大の歴史(東京美術学校編)」の開催について

2. 杜の会会報『杜』第53号でのGACMA特集について

3. 東京美術学校在籍者一覧(昭和期入学者)のWEB公開について

4. 美術学部内の大学史関連資料調査(大学美術館・図書館との情報共有)について

5. センター内業務用アーカイブの整備(作家ファイル・画像サーバの整備)について

6. Webページの整備(階層の整理およびバイリンガル化)(1月予定)について

7. 目録・画像・PDF化したデジタルデータ公開の準備(来年度以降に向けての活用計画)について

8. 研究成果の発表について

9. 令和4年度前期の活動報告

1-2.学内外からの資金獲得状況

杜の会助成金

杜の会より、東京藝術大学美術学部紹介動画作成費として合計80万円の配分を受けた。

2.資料の管理・公開

2-1.資料の受入・整理

①資料の移管・受入

移管

移管元	主な内容	点数
大学美術館	大学史関係資料	1,013点
工芸科漆芸研究室	松田権六関係資料	700点
会計課	火鉢	2点
芸術学科日本・東洋美術史、工芸史研究室	東京藝術大学製食器	6点

受入

寄贈者	主な内容	点数
菊田二郎	吉川麗華関係資料	21点
吉川道子	上野直昭関係資料	50点
夏堀大司	夏堀全弘「藤田嗣治芸術詩論草稿」	6点
黒川廣子	『御大礼奉祝献品図録』『大婚二十五年奉祝献品図録』『御成婚奉祝献品図録』	3点
金子一夫	『一寸』第1～91号	89点
村上万里	石山彰関係資料	21点

②目録の整備・公表

目録のオンライン公開

- ・機関アーカイブズ(大学史史料)
- ・収集アーカイブズ(久保田鼎関係資料／上野直昭関係資料／六角紫水関係資料／大村西崖関係資料／斉藤佳三関係資料／三好二郎関係資料／前野まさる関係資料／中村勝馬関係資料)

2-2.資料利用者への対応

①資料利用状況

	閲覧室利用者数	問合せ数	資料閲覧者数	画像提供数	掲載放映許可数
4月	—	1	2	2	2
5月	13	2	1	2	2
6月	30	3	2	0	0
7月	8	0	1	0	0
8月	—	4	0	1	2
9月	—	5	0	0	0
10月	24	0	1	1	0
11月	20	3	0	1	0
12月	21	3	0	0	0
1月	87	2	0	1	0
2月	31	2	0	3	1
3月	—	4	0	0	0

②資料活用実績

- 大西純子「東京芸術大学美術学部所蔵上野直昭資料について」『美術研究』第435号、東京文化財研究所文化財情報資料部、2021年12月(2022年度未報告分)
- 後藤亮子「大村西崖と阿部房次郎—西崖資料から交友関係を読み解く—」『関西中国書画コレクション研究会創立10周年記念 国際シンポジウム報告書 中国書画コレクションの时空』関西中国書画コレクション研究会、2022年3月
- 瀧本弘之・戦暁梅『近代中国美術の境界 越境する作品、交錯する芸術家』アジア遊学269、勉誠出版、2022年5月
- テレビ熊本「FNSドキュメンタリー大賞 泡沫の夢—戦没学生 よみがえる青春の影—」2022年5月30日放送
- 文京区立森鷗外記念館編『鷗外遺産—直筆資料が伝える心の軌跡』文京区立森鷗外記念館、2022年10月
- 古田亮「『大学史』のちから」『東京芸術大学美術学部杜の会会報 杜』第53号、杜の会事務局、2022年12月
- 浅井ふたば「GACMA 徹底解剖！」『東京芸術大学美術学部杜の会会報 杜』第53号、杜の会事務局、2022年12月
- AKIKO WALLEY「The Power of Concealment: Tōdaiji Objects and the Effects of Their Burial in an Early Japanese Devotional Context」『Journal of Asian Humanities at Kyushu University』VOLUME 7、九州大学文学部・大学院人文科学府・大学院人文科学研究院、2022年(オープンアクセス版)
- 亀岡市文化資料館編『亀岡市文化資料館第71回企画展「文化財と過去・現在・未来」』亀岡市文化資料館、2023年1月
- 『鳥取県立博物館開館50周年記念企画展 安岡信義 1888-1933—近代洋画の黎明期を生きた画家』鳥取県立博物館、2023年2月

3. 社会教育事業

3-1. 展示の開催

①「藝大美術学部キャンパスの歴史(開校当初)」

2022年5月8日～7月29日、田中記念室前室

東京芸術大学美術学部の前身である東京美術学校がここ上野の地に開校して130年余が経過した。開校当初の敷地図は、現在の上野校地の敷地図と大きく異なる。当時の敷地図を展示して、現在のキャンパスの形に近づく大正初期までの変遷を追った。

出品リスト

- ・『東京美術学校一覧』明治三十二年度(GACMA所蔵)
- ・『東京美術学校一覧』大正元年度(GACMA所蔵)
- ・「東京教育博物館／エッチング」(国立科学博物館所蔵)
- ・「東京教育博物館／写真」(GACMA所蔵・写真原版は建築学会所蔵)
- ・「自明治二十二年至大正八年 土地建物ニ関スル書類 東京美術学校」(GACMA所蔵)
- ・「東京芸術大学施設課 東京芸術大学美術学部配置図」(GACMA所蔵)
- ・現在の東京芸術大学上野キャンパスマップ(『東京芸術大学 大学概要2021』2021年8)

月、東京藝術大学、27頁)

②「東京美術学校 功労者の顕彰～岡倉天心・フェノロサ・正木直彦」

2022年10月5日～12月16日

公開講座「歩いて分かる藝大の歴史(東京美術学校編)」(2022.10.5)の関連展示。東京美術学校ではその設立と発展に多大な貢献を果たした人物に対して、業績を顕彰する彫像や石碑などが製作され、今も校内のそこかしこに面影をとどめる。美術学校と日本の近代美術の発展に特に大きな役割を果たした3人の功労者、学校創設の主導者で第2代校長の岡倉天心、日本美術研究と教育制度の創設に尽力したアメリカ人アーネスト・フェノロサ、学校の基盤を強固に築き発展させた第5代校長正木直彦とその顕彰に関わる記念物を取り上げ、その功績をしのぶ展示を行なった。

出品リスト

資料(いずれもGACMA所蔵)

- ・『東京美術学校校友会月報』第9巻第1号(大正9年10月)
- ・廣群鶴 家族写真(大正14年撮影) 写真原板遺族所蔵, 加藤勝丕氏提供
- ・『東京美術学校校友会会報』第6号(昭和10年12月)
- ・正木記念館図面(青焼き)『正木記念館新築工事仕様書』
- ・国華倶楽部寄贈品目録

写真(いずれも原作は大学美術館所蔵)

- ・斐諾洛薩先生碑 長原孝太郎ほか作(彫刻1187)
- ・フェノロサ・ポートレート拓本(拓本399)
- ・岡倉天心像 平櫛田中ほか作(彫刻1173)
- ・正木直彦像 沼田一雅作(彫刻1129)
- ・正木直彦小型像(正木直彦資料(雑美術工芸品575)のうち)

③「藝大と入試—東京美術学校時代の入学試験関係資料—」

2023年1月30日～2月2日、田中記念室前室

入試シーズンに合わせ、当センターで所蔵している入学試験関係資料を展示した。藝大美術学部は志願倍率が約12倍(2022年度)と高いが、東京美術学校入学は昔から「狭き門」であった。入試の変遷が分かる明治44(1911)年から昭和22(1947)年までの入試問題を綴じた簿冊、今から90年前の昭和8(1933)年に実施された工芸科の入試問題を展示した。

出品リスト(いずれもGACMA所蔵)

- ・「明治四十四年以降 各科入学試験問題綴 教務係」
- ・「昭和七年以降昭和二十二年迄 各科入学試験問題綴 教務係」
- ・「昭和八年度 受験者心得」(複製)
- ・「昭和八年度 入学願書受理数」(複製)
- ・「昭和八年度 入学者選抜試験問題(工芸科) 歴史」(複製)
- ・「昭和八年度 入学者選抜試験問題(工芸科) 作文」(複製)
- ・「昭和八年度 入学者選抜試験問題(工芸科) 塑造」(複製)
- ・「昭和八年度 入学者選抜試験問題(工芸科) 図案」(複製)

3-2.他機関開催の展示会への出陳

展覧会名	会場	開催期間	資料名
亀岡市文化資料館第71回企画展「文化財と過去・現在・未来」	亀岡市文化資料館	2023年1月26日～3月5日	・京都府下古社寺巡礼記 第一 六角紫水関係資料CA006-019
鳥取県立博物館開館50周年記念企画展「安岡信義 1888-1933—近代洋画の黎明期を生きた画家」	鳥取県立博物館	2023年2月11日～3月21日	・白浜徹教授還暦祝賀会の案内 ・「図画師範科の教師と第1,2期生」絵葉書 ・英語版学校案内 ・東京美術学校年報

4.普及活動

4-1.大学教育の担当

①美術館資料論 第13回「藝大アーカイブズ 美術館資料／GACMA」

2022年7月11日

当センターが所蔵する資料群は、本学の歴史を知るためだけでなく、日本の近現代美術史を理解するためにも重要な基礎資料である。美術について学ぶ本学の学生に当センターの資料群を紹介し、部屋の利用方法について説明した。

②2022年度 公開講座「歩いて分かる藝大の歴史(東京美術学校編)」

2022年10月4、5日

2022年10月4日、5日の二日間に渡って公開講座を開催した。新型コロナウイルス感染症の影響がある中にも関わらず、4日は12名、5日は13名の参加者が集まった。講座は、参加者の検温、アルコール消毒の徹底、部屋の換気など万全な感染症対策を講じて行った。

1日目は上野校地の歴史スポットをめぐりながら藝大美術学部の前進である東京美術学校の歴史を紹介した。美術学部の正門からスタートし、岡倉天心像、フェノロサ記念碑、大石膏室、学食、陳列館を回った後に休憩をはさみ、赤レンガ1号館、旧正門、美校本館の玄関、正木記念館を見学して正木記念館内にある当センターで解散した。

2日目は、藝大最古の建物である赤レンガ1号館を会場に、古田亮先生による「東京美術学校の歴史」と題したレクチャーを行った後、当センターで所蔵する岡倉天心直筆の生資料などを閲覧した。熱心な受講者からたびたび質問を受け、少人数ながら熱気にあふれた公開講座となった。



③創造と継承とアーカイヴ:領域横断的思考実験

2023年2月1日(リモート形式)

受講者を対象に、東京美術学校における明治期の卒業制作および卒業式と生徒成績品展覧会の変遷について解説した。内容は令和4年度の研究会をもとに、大学美術館所蔵の明治42年生と成績品展覧会の展示風景写真を主にとりあげ、同年の「卒業生姓名及卒業製作」や現存作品との対照から画面の分析を詳細に行い、展示作品のいくつかを明らかにした。令和5年度春季開催に向けて準備が進行中であった『「買上展」藝大コレクション展2023』(東京藝術大学大学美術館)とも関連し、また受講者が自校を知るといふ大きな授業目標にかなうよう内容を選定した。

4-2. 「東京美術学校在籍者一覧」(大正元年度～昭和9年度入学者)公開

当センターでは昨年度から継続的に東京美術学校に在籍した生徒について調査しているが、本年度は大正元年度から昭和9年度までに入学した生徒3,447名の情報を当センターのウェブページで公開した(<https://gacma.geidai.ac.jp/contents/enrollment/>)。昨年度はPDFデータのみでの公開であったが、本年度からはより汎用性の高いエクセルデータも公開している。

「東京美術学校在籍者一覧」の出典元とした『東京美術学校一覧』の刊行は昭和14年度で終了しているため、入学から卒業までを追えるのは昭和9年度入学者が限度であった。戦前・戦中期に入学した昭和10年度以降の生徒の在籍調査は、別の資料を用いて次年度以降も継続する予定である。

「東京美術学校在籍者一覧」の公開後、経歴不明の人物が実は東京美術学校在籍者であったことが分かった、という連絡を各地からいただいた。加えて、美校生のその後の活動に関する新たな情報を得られたため、いずれデータベースに反映させる予定である。

4-3. 大学史動画作成・公開

歴史と伝統を持つ本学のブランド力を広く発信することを目的として、本学術学部の歴史、とくに近現代美術史とともに歩んできた東京美術学校の歴史を10分程度の動画にしてYou Tubeで公開した(<https://www.geidai.ac.jp/outline/introduction/history>)。映像制作は先端表現科博士課程の中川陽介氏、ナレーションは元NHKアナウンサー山根基世さんに依頼した。動画制作のメイキング余話は、『東京藝術大学美術学部杜の会会報 杜』第53号に掲載されている(古田亮『「大学史」のちから』、4,5頁)。

動画制作には、杜の会からの資金援助を受けました。杜の会会長の光井渉先生、杜の会事務局の皆様には感謝申し上げます。

5.調査・研究活動

5-1.研究会の開催

本学の情報資源活用が求められるなか、GACMA所蔵資料を用いた研究活動に焦点を当て、その成果を発表する場として研究会を開催した。第2回目となる研究会は、関係者だけでなく学内にも参加者を募り、35名（うち学外者8名）が参加した。

第2回GACMA研究会 2022年12月20日

- 18:00～18:10 ご挨拶 古田亮(近現代美術史・大学史研究センター長)
- 18:10～18:40 発表① 「明治期の卒業式と生徒成績品展覧会」芹生春菜(近現代美術史・大学史研究センター 学術インストラクター)
- 18:40～19:10 発表② 「東京美術学校と商業美術—大正後期から昭和初期における懸賞図案への取り組み—」工藤沙貴(大学院美術研究科芸術学専攻 修士1年)
- 19:10～19:40 発表③ 「先人の記録が現代の制作者に語ること—友禅作家中村勝馬が残した資料を中心に—」石原真理(大学院美術研究科文化財保存学専攻 修士2年)
- 19:40～20:00 自由討論

[発表要旨]

●明治期の卒業式と生徒成績品展覧会

芹生春菜(近現代美術史・大学史研究センター 学術インストラクター)

卒業制作は東京美術学校の教育課程を特徴づける重要な行事であり、買い上げ制度によって学内に作品が蓄積され、膨大なコレクションを形成している点でも貴重である。学生にとっても教員にとっても教育の集大成となる課題であり、作家人生において画期となるすぐれた作品が生み出されるケースも多い。

本発表は当センター(GACMA)が令和3年度の冬期臨時開室(1月28日、31日)に行った卒業式・卒業制作に関する展示をもとに、当センターで収集整理された文字資料と、学内(主に大学美術館)所蔵の資料とを関連づけた活用実績として報告を行ったものである。

卒業制作が教育課程に規定されたのは開校の翌年(1890)であるが、前年の入学者にも適用されたため第1回卒業生から毎年卒業制作を行なうことになった。卒業制作の制作費は学校から支給され、科ごとに1人あたりの金額が決められていた。例えば明治44年には日本画・西洋画・図案は一人につき15円、塑造・木彫・牙彫は25円、鋳造は35円、金工は45円、漆工は75円、図画師範科は7円以内以内とされた。また材料は教官が保管し残余は返納すること、材料の一部を個人で負担する場合も作品は学校の所有となることも規定され、制作費の支給が卒業制作の学校への収蔵を前提としていたことを推測させる。ただし収蔵場所等の理由から科によっては全員収蔵ではなく選抜された作品のみが収蔵されるようになり、やがて卒業制作の買い上げは優秀作品の褒章的な意味合いを帯びていった。

学校に納められた卒業制作作品は、平時の授業の制作品、教員作品、参考品(古美術の優品等)とともに成績品展覧会として展示されることがたびたびあった。明治27年(1894)、開校から5年間の教育成果として大々的に催された「授業成績物展覧会」は、現代に続く卒業制作

展の嚆矢と見なされる。本発表ではこうした展示が明治30年代末には卒業式にあわせて行われるようになり、現在の卒業制作展に近い催事となっていったことを指摘した。また明治40年代における卒業式と生徒成績品展覧会の事例を、大学美術館所蔵の古写真資料を援用しつつ紹介し、学内に散財する諸資料を総合的に照会することにより、作品や展示空間を再現的に考察できる可能性についても報告を行った。

●東京美術学校と商業美術

—大正後期から昭和初期における懸賞図案への取り組み—

工藤沙貴(大学院美術研究科芸術学専攻 修士1年)

筆者は卒業論文において、明治29(1896)年に東京美術学校に設置された図案科の、商業美術への取り組みを明らかにし、社会における図案科の立場について検討した。発表では、学校を窓口とした「商業美術と生徒の接点」としてGACMA所蔵の校内懸賞図案書類に着目しながら、図案が大衆化する大正後期から昭和初期にかけて、外部組織が東京美術学校の生徒に対してどのような図案制作を求めているのか、また誰が東京美術学校の商業美術教育を担っていたのか、といった部分の考察を重点的に紹介した。

パリ万博以降の図案への関心の高まりや工業技術力の向上は、美術工芸とほぼ未分離で語られてきた「図案」というカテゴリーから、産業図案や商業図案を派生させた。図案科では当初、絵画を根底においた伝統工芸図案と建築装飾図案の指導を行っていたが、そうした図案の成立によって、図案科が拘っていた古典研究は次第に時代錯誤とみなされ、東京美術学校内外から不満の声が上がる結果となった。

社会からの要請にも敏感だった生徒らは、授業で満たされないものを課外活動に求めている。中でも本発表で取り上げた校内懸賞図案は明治33(1900)年から開始されると、図案科を中心とした多くの生徒が外部からの図案制作依頼に応えていった。

昭和8(1933)年になると学校規則が大幅に改正され、図案教育が変化した。基礎教育では、それまで重視されていた古典模写と便化に代わって、東京美術学校独自の的方法論である「解体組織」がキーワードとなり、より現代生活に沿った図案課題が増加した。新たに着手した商業美術に関しては十分な授業が行われていなかったが、広告などの印刷図案が多かった当時の校内懸賞図案が、自由参加の実践的な課題として補完的な役割を担っていたと考えられる。

懸賞図案を依頼した企業の多くは、モダンで独創的なインパクトを求め、東京美術学校生の作品が自社の図案に新たな風を吹かせることを望んでいた。審査員が明記されていた懸賞は2点のみであったが、「図案予備金剰余」と題される会計書類の審査手当金受領記録から、基本的に図案科教員が審査員を勤めたことが明らかになった。また中でも図案科教員の1人であった森田武は、大正11(1922)年から長期的に審査を担当しており、東京美術学校の商業美術形成を支えた重要人物の一人だったと指摘した。

●先人の記録が現代の制作者に語ること

—友禅作家中村勝馬が残した資料を中心に—

石原真理(大学院美術研究科文化財保存学専攻保存修復工芸 修士2年)

筆者は1997年に旧大塚テキスタイルデザイン専門学校の友禅科を卒業し、その後日展などに作品を発表して友禅作家として活動している。この友禅科は、関東で初めて「友禅」にて重要無形文化財保持者となった中村勝馬(1894～1982年)によって1969年に設立された。中村はそれまで工房内での伝承が一般的であった技術伝承を、はじめて教育という場で男女平等

に行い、戦後関東の後継者増加につなげた。現在、伝統技術及び材料や道具の継承が危ぶまれる中で、筆者は技術継承する者の一人として、これまでの東京の友禅の経緯と伝承方法を知りたいと思い、自身の始まりである中村勝馬の資料に興味を持った。藝大の修了制作では、「中村勝馬の活動記録からみる東京藝術大学大学美術館所蔵〈七宝に鱗紋黒留袖〉の一部再現について」と題して残された作品・資料を軸に作品を再現し、技術継承が最も難しかったと思われる戦中戦後の東京の友禅技術者の動向を論文とした。修了研究では多くの資料を活用したが、閲覧を通して、先人の記録は材料・技法など制作に関する研究だけではなく、現在作品を制作する者にとってこそ次の制作に通じる有効な面があると感じ、その効果を中心に発表した。

[時代を超えた共有できる想い]

GACMAが所蔵する中村勝馬関係資料は、友禅の材料や取引先、販売価格など制作に関する資料だけでなく、第二次世界大戦統制下での企業統合された組合の名簿類から申請書、訴え、丸技と呼ばれる統制令の例外措置に関する記録、各地方染織関係者との書簡、中でも戦後設立から深くかかわった日本工芸会に関する資料が多く残される。また、中村勝馬の個人的な感情や考えをその時々で書いたメモ類も多く残されていた。発表では、戦中に技術者が冷遇軽視されて制作したものが正当に評価されない現状を嘆くメモ、重要無形文化財保持者認定に認定されながらも戦後の生活難で制作が継続できない旨を無形文化課長に伝える詫び状の写し、自身が鑑査の立場となった時に審査の公平性とは何かを悩む走り書きなどを紹介した。これらの資料は、時代や立場は違えども、現在の制作者に共通する制作環境、金銭、作品の評価・講評、団体などからくる不安や悩みであり、筆者が共有できた想いであった。

[まとめ]

現代の制作者が制作のために資料を利用した結果、技術面では、過去の材料や制作技法を知ること、技術向上や新たな制作ヒントを得ることができた。精神面では、作家の制作周辺で生じた感情を知ること、制作を続けていくための手掛かりを得ることができた。制作を続け、新たな作品を生み出した者が評価される世界だからこそ、制作者の技術面と精神面の両面にアドバイスを与えてくれる先人資料を活用することは有効だと感じた。

5-2. 研修会への参加

- ・情報公開・個人情報保護・公文書管理制度の運用に関する研修会(オンライン) 2022年7月19日／浅井
- ・アーカイブズ・カレッジ長期コース 2022年7月～9月(分割受講2年目)／浅井

6.業務日誌

(2022年4月1日～2023年3月31日)

- | | | | |
|------|------------------------------------|-------|-------------------------------------|
| 4/5 | 大掃除 | 10/6 | 定期清掃 |
| 4/19 | ご遺族より吉川麗華関係資料受領 | 10/12 | 文科省依頼、歴史資料等保有設
利用規程インターネット公開 |
| 4/25 | GACMA定例会議 | 10/17 | GACMA定例会議 |
| 4/26 | ご遺族より上野直昭関係資料受領 | 10/25 | 定期清掃 |
| 4/28 | 中央広播電視総台(中国)が資料撮
影のため来室 | 10/26 | 文科省依頼、歴史資料等保有施
設目録インターネット公開 |
| 5/8 | 前室で展示開始(~7/29) | 10/27 | 大学史動画インターネット公開 |
| 5/10 | 定期清掃 | 11/15 | 定期清掃 |
| 5/16 | 音楽史史料室、AMCスタッフと新年度
顔合わせ | 11/28 | 大学美術館の資料を受領 |
| 5/31 | 令和3年度年報・紀要発行 | 12/2 | 「東京美術学校在籍者一覧」(昭
和期入学者)インターネット公開 |
| 5/31 | 大学史動画作成のための打合わせ | 12/6 | 定期清掃 |
| 5/31 | AMC情報資源調査の報告終了 | 12/7 | 音楽史史料室、AMCスタッフと協
働研究のための意見交換会 |
| 5/31 | 定期清掃 | 12/19 | 研究会開催(オンライン) |
| 6/6 | 大学史動画作成のための打合わせ | 12/20 | 定期清掃 |
| 6/16 | 「東京美術学校在籍者一覧」(大正期
入学者)インターネット公開 | 12/26 | 大学図書館で協働研究対象資
料である「諸新聞切抜」を閲覧 |
| 6/20 | GACMA定例会議 | 1/10 | 定期清掃 |
| 6/21 | 定期清掃 | 1/16 | 松田権六関係資料の打合せ |
| 7/2 | 収蔵・保存環境整備、資料を中性紙
保存箱に入れ替え | 1/17 | 亀岡市文化資料館に資料を貸出 |
| 7/11 | 「美術館資料論」の授業でGACMA紹
介(オンライン) | 1/23 | GACMA定例会議 |
| 7/11 | GACMA定例会議 | 1/25 | 鳥取県立博物館に資料を貸出 |
| 7/12 | 定期清掃 | 1/30 | 前室展示「藝大と入試」(~2/3) |
| 7/26 | 大学史動画作成のための打合せ | 2/7 | 定期清掃 |
| 7/28 | 美術学部会計・教材係より火鉢引き取
り | 2/15 | ご遺族より石山彰関係資料受領 |
| 8/2 | 定期清掃 | 2/20 | 収蔵・保存環境整備、資料を中
性紙保存箱に入れ替え |
| 8/9 | 収蔵・保存環境整備、虫害対策 | 2/22 | 次年度クリエイティブ・アーカイヴ
演習打合せ |
| 9/12 | 未来創造継承センターと打合せ | 3/7 | 松田権六関係資料の打合せ |
| 9/13 | 定期清掃 | 3/7 | 定期清掃 |
| 9/14 | 大学史動画のナレーション入れのた
め山根基世氏来室 | 3/9 | 消防点検 |
| 9/22 | GACMA運営委員会の開催 | 3/15 | 亀岡市文化資料館より資料返却 |
| 9/26 | 公開講座で使用する赤レンガ、大石
膏室の下見 | 3/27 | 鳥取県立博物館より資料返却 |
| 10/4 | 前室で展示開始(~1/29) | 3/28 | 定期清掃 |
| 10/4 | 公開講座1日目開催 | 3/29 | 大学美術館「買上展」の展示準
備 |
| 10/5 | 公開講座2日目開催 | 3/31 | 大学美術館「買上展」にて資料と
展示パネルを出陳展示(~5/5) |

III 研究報告

大正期から昭和初期の東京美術学校—学務関連規定と修学状況を中心に—

近現代美術史・大学史研究センター
学術インストラクター 浅井ふたば

はじめに

当センターは、昨年度から東京美術学校に在籍した生徒のデータベースである「東京美術学校在籍者一覧」の作成を開始し、令和5年(2023)3月現在、当センターのWebページ(<https://gamma.geidai.ac.jp/contents/431-2/>)で明治22年度から昭和9年度までの入学者情報を公開している¹。「東京美術学校在籍者一覧」は東京美術学校に在籍した生徒一人一人の情報から成り立つが、これらの情報が集積されると東京美術学校という組織を表す。したがって本稿は、大正期から昭和期の在籍者情報に学務に関する規定²などの情報を併せて、東京美術学校(以下、「美校」)の全体像を把握することを目的とする³。

なお、本稿で用いる昭和期は昭和2年(1927)から昭和9年(1934)までを指す。

1. 正規の課程

【豫備科、豫科】

東京美術学校は、明治22年(1889)の開校以来、予備教育課程を修了した後に専門課程である「本科」に進む二段階の教育課程を取り入れた。明治38年(1905)に設置された「豫備科」は大正に入っても引き継がれ、大正12年度に廃止されるまで存続した。

豫備科の入学資格は、17歳以上26歳以下の男子で、私立中学校の卒業者、専門学校入学者検定の合格者または無試験検定の受験資格保有者、工業学校の卒業者、師範学校の卒業者に対して与えられた⁴。入学志願者が募集人数を超えた場合、選抜試験を実施した。豫備科生徒は、修業期間である1学期の間(凡そ4月中旬から6月下旬の約2ヶ月間半)、本科で必要となる実技と学科を学び、最終試験で入学を認められた者が希望の科に進学することができた。なお、豫備科は東京美術学校に入学する前段階とみなされ、予備科入学者の名前は『東京美術学校一覧』に記載されなかった。

大正12年度から昭和7年度までの期間は予備教育課程が廃止されたが、昭和8年度に「豫科」として再び設置された。豫科の入学試験は「中学校第4学年修了」程度の学力が必要とされ、入学後、修業年限の1年間で志望科の実習と美術史、語学などを学んだ⁵。

¹ 「東京美術学校在籍者一覧」は、明治23年(1890)から昭和14年(1939)まで刊行された『東京美術学校一覧』(国立国会図書館デジタルコレクションで公開)を典拠としている。これによると、1人の生徒が入学し卒業するまでを追跡できるのは、昭和9年度の入学者が限界であった。昭和10年度以降の在学者情報に関して、現在調査中である。

² 規則は、当該年の『東京美術学校一覧』に記載されている「東京美術学校規則」を参照した。

³ 明治期については、拙稿「明治期の東京美術学校—教育課程と修学状況を中心に—」『美術学部近現代美術史・大学史研究センター年報・紀要』(令和3年度、2022年5月)を参照のこと。

⁴ 大正12年度に入学年齢制限が廃止され、入学資格であった工業学校卒業者及び師範学校卒業者の項目が削除された。「東京美術学校校則(大正元年12月改正)第4章入学在学及退学規程」『東京美術学校一覧』(大正元年度)、東京美術学校、1912年。

⁵ 「東京美術学校校則(昭和8年2月改正)第3章豫科」『東京美術学校一覧』(昭和8年度)、東京美術学校、1933年。

【本科】

明治22年(1889)、美校は絵画科、彫刻科、美術工芸科の3科を設置して授業を開始したが、その後新学科を増設し、大正元年(1912)の段階で日本画科、西洋画科、彫刻科、図案科、金工科、漆工科、鑄造科の7科を置いた。大正期以降も、学科組織は変化した。

大正4年(1915)、図案科は第一部(工芸図案)と第二部(建築装飾)を置く二部制となった。明治29年(1896)に設置された図案科は、工芸品の図案教育と建築物の装飾図案教育の二本柱で授業を実施⁶、この間建築科として分離独立させる動きもみられたが、大正4年(1915)になってついに科を分割した。また同年、新たに製版科と臨時写真科が設置された⁷。大正8年(1919)には、彫刻科が塑造部と木彫部の2部に分かれた。彫刻科は明治32年度(1899)に塑造科を新設し、彫刻科木彫科と彫刻科塑造科の2科に分けて塑造及び木彫、牙彫、石彫など様々な素材を扱う選択授業を実施した後、明治34年度(1901)に「彫刻科」として統合したが、大正8年度に再び塑造部と木彫部を置いた。大正12年(1923)には、金工科が彫金部と鍛金部の2部に分かれ、図案科第二部を図案科から分離して新たに建築科として独立させた。また、臨時写真科は写真科に改称した。昭和7年(1932)、約30年にわたって美校の校長を務めた正木直彦が退官すると、その後校長に就任した和田英作によって組織改編が行われた。昭和8年(1933)、本科を日本画科、油画科(西洋画科から名称変更)、彫刻科、工芸科、建築科の5科に整理して、このうち彫刻科には引続き塑造部と木彫部を置いた。大きな変更点は、工芸科を設置したことである。それまであった図案科、金工科(彫金部、鍛金部)、漆工科、鑄造科を工芸科として統合し、各分野を図案部、彫金部、鍛金部、鑄金部、漆工部の5部に改めた。

[表1]東京美術学校学科変遷表

	大正元年度 (1912)	大正4年度 (1915)	大正8年度 (1919)	大正12年度 (1923)	昭和8年度 (1933)
予備教育	豫備科	豫備科	豫備科	—	豫科
本科	日本画科	日本画科	日本画科	日本画科	日本画科
	西洋画科	西洋画科	西洋画科	西洋画科	油画科
	彫刻科	彫刻科	彫刻科塑造部 彫刻科木彫部	彫刻科塑造部 彫刻科木彫部	彫刻科塑造部 彫刻科木彫部
	図案科	図案科第一部 図案科第二部	図案科第一部 図案科第二部	図案科	工芸科図案部 工芸科彫金部
	金工科	金工科	金工科	金工科彫金部 金工科鍛金部	工芸科鍛金部 工芸科鑄金部
	漆工科	彫刻科塑造部 彫刻科木彫部	漆工科	漆工科	工芸科漆工部
	鑄造科	鑄造科	鑄造科	鑄造科	
	—	—	—	建築科	建築科
	—	製版科	製版科	—	—
	—	臨時写真科	臨時写真科	写真科	—

当該年度『東京美術学校一覧』を参照して作成

⁶ 美校では開校当初から工芸図案教育と建築装飾図案教育が実施されていた(浅井ふたば「東京美術学校初期の図案教育—工芸図案と建築装飾図案—」『LOTUS』第41号、日本フェノロサ学会、2021年3月)。

⁷ 製版科は大正10年度まで、臨時写真科は大正12年度まで美校に置かれていたが、大正10年(1921)に開校した東京高等工芸学校に引き継がれた。製版科と臨時写真科及び写真科の修業年限は3年であった。製版科と臨時写真科については『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇』(第二巻、芸術研究振興財団©・東京芸術大学百年史刊行委員会、1992年)の598～600頁・655～664頁を参照のこと。

本科の修業年限は、大正元年度から大正11年度までは4年と2学期間、大正12年度から昭和7年度までは5年、昭和8年度以降は4年であり、予備教育課程を通して5年であった。大正12年度から昭和7年度までは予備教育過程が廃止されたため、大正12年(1923)に本科の入学規程が定められると⁸、大正12年度から入学期は4月となり、明治以降続いてきた9月入学から時期が変更となった。またこの時期、入学資格の年齢制限が廃止され、男子の「中学校卒業者」「専門学校入学者検定規程に依り一般の専門学校入学に關し指定せられたる者」「専門学校入学者規程に依り試験検定に合格したる者」であれば、入学試験を受験することができた。

本科入学後の進級の条件は、「試験規程」に明記されている。大正元年以降、美校では各学期ごとに試験を実施し、3学期の評点を平均した得点を進級要件とした。試験を実技と学科に分け、実技と学科の得点をそれぞれ平均したものを合わせて二等分し、60点以上あれば進級できた。ただし、実技試験の得点が1科目でも60点に満たない場合、または学科試験の得点が1科目でも40点に満たない場合は進級することができなかつた⁹。大正12年度の規則改正では、実技試験と学科試験の各科目で進級の可否が判断されることとなり、実技試験は1科目60点以上、学科試験は1科目50点以上が及第点とされた。また第1学年と第2学年の生徒は、必修科目で合格点が得られなかつた場合は進級することができなかつた。第3学年以上になると、実技試験では合格しても学科試験では不合格となった者に対して、次学年で学科を再履修することが許された¹⁰。昭和8年度の規則改正では、実技試験では平均60点以上、学科試験では平均50点以上を取らなければならず、さらに試験の得点の平均が60点以上なければ進級できなかつた¹¹。卒業要件は、学年試験を通過したうえで卒業製作を完成させ、これが合格と認められることであり、この場合は卒業証書が授与された。大正12年度以降は、卒業製作を完成させれば卒業証書が授与された¹²。

大正期から昭和期の本科在籍者は2,643人(大正期1,572人、昭和期1,071人)である。大正期は毎年98～173人が入学して計1,572人が在籍し、昭和期は毎年145～180人が入学して計1,071人が在籍した[表2]。

[表2]大正元年(1912)～昭和9年(1934)の本科在籍者2643人の内訳



⁸ 「東京美術学校規則(大正12年5月改正) 第4章入学在学及退学規程」『東京美術学校一覽』大正12年度13年度合冊、東京美術学校、1923年。

⁹ 「東京美術学校規則(大正元年12月改正) 第7章試験規程」『東京美術学校一覽』大正元年度、東京美術学校、1912年。

¹⁰ 前掲注9。

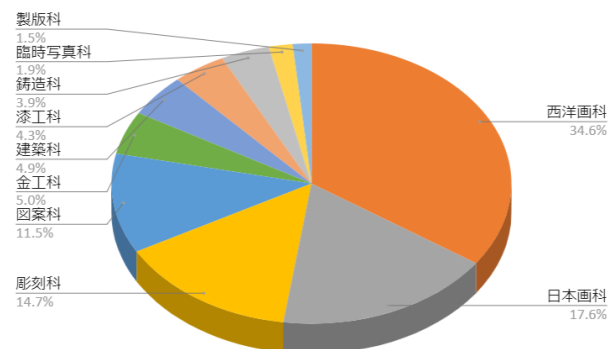
¹¹ 「東京美術学校規則(大正12年5月改正) 第7章試験規程」『東京美術学校一覽』『東京美術学校一覽』大正12年度13年度合冊、東京美術学校、1923年。

¹² 前掲注11。

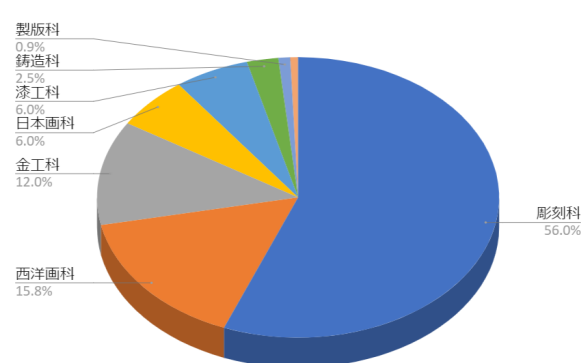
このうちの卒業生数は2,191人(大正期1,300人、昭和期は891人)で、卒業率はいずれも約83%であり、明治期の卒業率約73%と比較すると卒業生の割合が増加していることがわかる。また中退者は452人(大正期272人、昭和期180人)で、大正期から昭和期の中退率は約17%であった。明治期と比較すると、大正期以降に美校の修学状況はかなり改善されたといえるだろう。

本科在籍者2643人の専攻分野別にみた分布は、西洋画科の915人が最も多く、以下順に日本画科466人、彫刻科388人、図案科304人、金工科131人、建築科130人、漆工科114人、鑄造科104人、臨時写真科51人、製版科40人である[表3]。

[表3]本科在籍者2643人の専攻分野別割合



[表4]選科科在籍者316人の専攻分野別割合



※学科の割合を求めると細分化し過ぎるため、専攻分野別で割合を出した。

2. 外教員養成課程

「東京美術学校規則」の第1条には、東京美術学校が作家養成と教員養成のための場であることが明記されている¹³。東京美術学校は、明治の開校当初から教員養成に向けた教育課程を設けたが、明治40年に図画師範科を設置して組織基盤を固めると、大正期以降は安定して図画教員を輩出した。

図画師範科の入学資格は、24歳以下の男子で¹⁴、道庁府県が設置した師範学校の卒業生、官公立中学校及び私立中学校の卒業生又は専門学校入学検定を合格した者に与えられた。入学志願者のうち、選抜試験に合格した者が入学することができた。図画師範科の生徒は卒業後に教職に就くことが定められており、授業料が免除されるのみならず、修学期間の3年間、学資として毎月6円が支給された。大正12年度以降、授業料は免除されたが学資の支給は廃止となった。「図画師範科卒業生服務規則」によると 図画師範科の生徒は中等学校の図画教員として教職に従事することが義務付けられていた。在学中に学資を受給した者は卒業証書を受領した日から2年、学資を受給しなかった者は卒業証書を受領した日から1年、まず文部大臣指定の学校で奉職し、前者の総従事期間は5年、後者は2年であった。大正10年度以降は、図画師範科のみを対象とした規則ではなく、高等師範学校及びこれに準ずる女子高等師範学校、臨時教員養成所、東京音楽学校甲種師範科の卒業生を対象とした「高等師範学校等卒業生服務規則」の規則に則ること

¹³ 『東京美術学校一覽』の「東京美術学校規則」によれば、一覽が発行された明治23年から昭和14年まで間、文言の変更はあったが主旨はおおむね変わっていない。

¹⁴ 年齢制限は大正12年度に廃止された。

となった。なお、図画師範科の生徒は、入学後の1学期末試験において成績不良だった場合、退学が命じられた¹⁵。

また美校では、明治期以降、図画師範科が開設する授業科目とは別の教職科目が設置され、本科の教員志望者は教職科目を履修することで教員資格を取得することができた。この教職科目は、昭和7年度までは日本画科、西洋画科、図案科の生徒のみに開講されていたが、昭和8年度以降は受講者の制約がなくなり、どの科の生徒でも教員資格を得ることが可能となった¹⁶。

大正期から昭和期の図画師範科在籍者は487人(大正期318人、昭和期169人)で、卒業した生徒は458人(大正期300人、昭和期158人)である。毎年15～28人が入学し、入学者数が最も多かったのは大正15年度の28人、最も少なかったのは大正5年度、昭和8年度及び昭和9年度の15人であった。図画師範科の中退者は29人(大正期18人、昭和期11人)で、中退率は約6%であり、同期間の本科中退率約17%と比較するとかなり少なかったといえる。また、留年者数は大正期から昭和期を通して7人であった。大正3年(1914)に図画師範科に入学し、大正10年(1921)に図画師範科助教授(昭和15年～教授)となった松田義之は、図画師範科は本科とは「なるべく引き離しておく方針」であったと回想しており¹⁷、美校内に異なる気質の科が併存していたと考えられる。

3. 外国人生徒

美校は明治期から外国人生徒を受け入れてきたが、規則中に外国人生徒に関する記述がみられるのは大正3年以降である。『東京美術学校一覽』(大正3年度)の「東京美術学校規則 第12章 授業料及其他の費用」において、外国人生徒の授業料が年間45円であることが明記された。大正3年(1914)当時の日本人生徒の授業料は25円であり、日本人より高めに設定されたことが分かる。外国人生徒を対象とした規則は、大正13年になって初めて制定された。「東京美術学校外国学生特別入学規程細則」によると、入学条件は学歴が「相当」あり、外務省、在外公館又は日本所在の当該公館からの紹介がある者であった。これらを備えた入学志望者は、本科又は図画師範科入学資格相当の学力試験に合格し、さらに一般入学者と同じ試験を受験し合格すれば「特別学生」として入学することができた¹⁸。

大正期から昭和期に在籍した外国人生徒は、全員が東アジアからの留学生であり、国・地域別の内訳は中国から36人、韓国から49人、台湾から17人、その他¹⁹3人の計105人(大正期70人、昭和期35人)であった。上記の「東京美術学校外国学生特別入学規程細則」が制定される以前、外国人生徒は選科生として入学する傾向が多くみられた。大正期に入学した70人の外国人生徒のうち41人は選科生であり、大正期に入学した日本人を含む選科生の約28%を占めた。外国人生徒の入学科は、西洋画科(昭和8年以降は油画科)が圧倒的に多く79人、図画師範科が12人、彫刻科が8人、図案科が3人、日本画科が2人、漆工科が1人であった²⁰。大正期から昭和期にかけての外

¹⁵ 「入学を許可せられたるもの第一学期末の成績不良なるときは又在学中持病に罹りて修学能はざるものは退学を命ず」とある(「東京美術学校規則(大正元年12月改正版)第8章図画師範科規程第52條」『東京美術学校一覽』(大正元年度)、東京美術学校、1912年)。大正3年12月改正版「第8章図画師範科規程」第52條、大正12年5月改正版「第8章図画師範科規程」第47條、昭和8年2月改正版「第4章図画師範科」第21條に同様の記載がある。

¹⁶ 「東京美術学校校則(昭和8年2月改正)第8條」『東京美術学校一覽』(昭和8年度)、東京美術学校、1933年。

¹⁷ 「図画師範科回想(故松田義之氏談話筆記)」『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇』第3巻、芸術研究振興財団◎・東京芸術大学百年史刊行委員会、1997年、379～380頁。

¹⁸ 前掲注11。

¹⁹ 『東京美術学校一覽』に記載されている「その他」生徒の出身地は、満州国奉天が1人、関東州旅順が1人、東洋が1人であった。

²⁰ この人数は、選科生を含んだ数字である。

国人生徒105人は全員卒業しており、中退者は一人もいなかった。この中には留年した生徒が3人²¹いた一方で、編入によって正規修学年限よりも早く卒業した生徒が3人²²いた。

4. 東京高等工業学校委託生

東京美術学校は、大正3年(1914)から3年間、廃止が決定となった東京高等工業学校及び附設職工徒弟学校製版部門の生徒89人を受け入れた。両校の生徒の氏名は、「東京高等工業学校委託生」として『東京美術学校一覧』(大正3年度～大正5年度)に記載されている。受け入れの経緯は以下の通りである²³。

東京高等工業学校は、単科大学昇格の準備を進める中で、工業図案科と製版部門を廃止することを決定した。大正3年(1914)、工業図案科の第1学年から第3学年までの生徒53名、附設工業教員養成所の第1学年から第3学年までの生徒8名、工業図案選科生の第1学年から第3学年までの生徒13名、研究生の第1学年から第2学年までの生徒3名、附属職工徒弟学校製版科の第1学年から第3学年までの生徒12名は、教室を美校に移し、卒業までの間ここで学んだ。またこの当時、美校は製版科の新設を文部省に要請していたことから、製版部門を美校に移し、製版科を新設して大正4年(1915)から授業を開始した。

なお、東京高等工業学校の工業図案科は一旦廃止されたが、美校の図案科と合併した後に科を再興する予定だった。しかし、実用品の美化を目的とする東京高等工業学校の図案教育と伝統美術を継承した工芸品製作を目的とする美校の図案教育の方針は相容れることなく、工業図案科は大正10年(1921)に設立された東京高等工芸学校に引き継がれた。

5. 選科・研究科

【選科】

選科は、本科に置かれた実技科目の履修を希望する者に対して設置された部門であり、本科生に欠員が出た場合に生徒を受け入れた。入学資格は年齢満17年以上満26年以下の男子²⁴で、明治期は無試験で選科に入学できたが、大正期以降は実技試験と学科試験が実施された²⁵。また選科の修業年限は、明治期には設けられていなかったが、大正3年以降は5年を年限とした²⁶。選科生の学費は本科生と同額であり、卒業時は、卒業試験に合格した者に証状が授与された。

大正期から昭和期の選科在籍者数は、316人(大正期252人、昭和期は64人)であった。このうち選科を卒業した生徒は241人(大正期191人、昭和期50人)であり、選科を中退した生徒は75人(大正期61人、昭和期14人)であった。選科生を最も受け入れた科は彫刻科であり、選科生の約56%を占める177人が彫刻科に在籍した。その次に多いのが西洋画科で50人、以下順に金工科38人、日本画19人、漆工科19人、製版科3人、図案科2人である[表4]。選科への入学者は昭和5年度以降減少し、昭和10年(1921)3月に卒業した8人が最後の選科生となった。

²¹ 大正2年度、大正3年度、大正9年度に各1人が留年した。

²² 大正8年度に2人、昭和5年度に1人が早期卒業した。

²³ 『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇』第2巻、芸術研究振興財団©・東京芸術大学百年史刊行委員会、600～609頁。

²⁴ 大正12年度の規則改正で年齢制限が廃止された(「東京美術学校規則(大正12年5月改正)」、第10章「選科生規程」)。

²⁵ 昭和8年度以降は入学試験が廃止された(「東京美術学校規則(昭和8年2月改正)」、第6章「選科」)。

²⁶ 「東京美術学校規則(大正3年12月改正)第10章」『東京美術学校一覧』(大正3年度)、東京美術学校、1914年。昭和8年度以降は修業年限の記載がなくなった(「東京美術学校規則(昭和8年2月改正)第6章」『東京美術学校一覧』(大正8年度)、東京美術学校、1933年)。

【研究科】

研究科は、卒業後も研究を継続したい者に対して設置された部門である。卒業試験の成績が80点以上の成績優秀者は研究科に無試験で入学することができ、成績が80点に満たない者は入学競技で選抜した。入学資格は28歳以下で、修業年限は3年であった²⁷。研究科の授業料は大正10年までは無償で行われたが、大正11年以降から授業料を徴収した²⁸。研究科では学期毎に1回平常競技を実施し、一学年の成績を平均して80点以上取得しないと次学年に進級できなかった。90点以上の成績優秀者には、制作費と研究旅行のための旅費が支給された。また、研究科修了生には証状が授与された。

大正期から昭和期の研究科進学者数は673人(大正期454人、昭和期219人)である。これは、大正期に美校に入学して卒業まで進んだ生徒1,776人のうちの約26%、昭和期に入学して卒業まで進んだ生徒1,114人のうちの約20%であった。この進学率は、明治期の27%²⁹とそれほど大きな変化はなく、美校卒業生の4～5人に一人が研究科に進んだことが分かる。

おわりに

以上、大正期から昭和期の東京美術学校における学務関連規則及び修学状況について確認し、東京美術学校の基本情報を明らかにすることができた。大正時代には、明治時代の草創期とは異なり、東京美術学校が組織の基礎を固めて組織の拡大を図る様子、続く昭和時代には大幅な規則改定が実施され、時代の変化を予測させるような動きもみられた。

本稿は学務関連規則の調査にとどまったが、今後は教育内容について調査し、「東京美術学校在籍者一覧」から読み取れる修学状況と併せて東京美術学校の実態を明らかにしたい。

²⁷ 昭和8年度から修業年限が2年に変更された(「東京美術学校規則(昭和8年2月改正) 第5章」『東京美術学校一覧』(大正8年度)、東京美術学校、1933年)。

²⁸ 大正3年以降、研究科生徒に対して実習費の15円を徴収するようになり(「東京美術学校規則(大正3年12月改正) 第9章」『東京美術学校一覧』(大正3年度)、東京美術学校、1914年)、大正11年以降、授業料として30円(本科の授業料は50円)を徴収した(「東京美術学校規則(大正4年2月改正) 第12章」『東京美術学校一覧』(大正4年度)、東京美術学校、1915年)。

²⁹ 前掲注3。

資料紹介 『金品寄付ニ関スル書類』

アーネスト・フェノロサ顕彰「斐諾洛薩先生碑」建立に関連して

近現代美術史・大学史研究センター
学術インストラクター 芹生春菜

はじめに

本年報の当該ページでも報告の通り、当センター(GACMA)では公開講座「歩いて分かる藝大の歴史(東京美術学校編)」(2022年10月5日)の関連展示「東京美術学校 功労者の顕彰～岡倉天心・フェノロサ・正木直彦」を同年10月5日～12月16日の期間に行った。本稿はこの時に展示した資料について紹介するものである。

東京美術学校の設立と発展に多大な貢献を果たした人物に対して、内外の関係者が業績を顕彰する彫像や石碑などを作る事業がしばしば行われ、今も構内のそこかしこに面影をとどめている。上記展示では特に大きな功績のある3人の功労者、アーネスト・フェノロサ、岡倉天心、正木直彦とその記念物を扱ったが、本稿ではこのうちフェノロサとその顕彰モニュメント「斐諾洛薩先生碑」を取り上げる。

なお構内の記念物に関する既刊の資料としては、『校友会月報』、『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇』に各々建立経緯が掲載されるほか、『東京芸術大学学生便覧』(2016年, 2018年)には現存する記念物等が構内分布図とともに紹介されており、旧教員の銅像や構内に植樹された名木等も扱われ、好適な構内ガイドとなっているので参照されたい³⁰。

アーネスト・フェノロサと斐諾洛薩先生碑

アーネスト・フェノロサ(Ernest Francisco Fenollosa, 1853-1908)はアメリカのマサチューセッツ州サレムに生まれ、ハーバード大学哲学科を卒業後、明治11年(1878)に東京大学のお雇い外国人講師として来日した。ビゲローとともに園城寺住職・桜井敬徳に傾倒し、1885(明治18)年に受戒して僧籍に入ったことでも知られる。日本美術に傾倒して鑑画会を設立、日本画の優位を唱えて復興運動を主導し、狩野芳崖とは特に深い親交を結んだ。図画取調委員として岡倉天心とともに欧州各国の美術教育を視察し、東京美術学校の設立に尽力。開校後は美学および美術史の講義を担当し、退任後年はボストン美術館東洋部長などをつとめた。

フェノロサの十三回忌にあたる大正9年(1920)9月21日、「フェノロサ氏記念会」主催の建碑および法要式典が校内で行われた。碑は一丈二尺(現高約3m余)の根府川石に、長原孝太郎の原面によるフェノロサの肖像、および井上哲次郎撰文・大村西崖揮毫の「斐諾洛薩先生碑」と題する長文の碑文を、石工廣群鶴³¹が鐫刻した。西洋風の胸像を嫌った故人に配慮して、画像入りの石碑の建立が選択されたという。

『東京美術学校校友会月報』第19巻第6号(大正9年10月)はフェノロサ氏記念号と銘打ち、建碑除幕式及び十三回忌法要の様相を詳しく報じている³²。同号の表紙にはフェノロサと特に親交のあ

³⁰ 『東京芸術大学学生便覧』は本学ウェブページにPDF版が公開されている。「学生便覧・ガイド」<https://www.geidai.ac.jp/life/gakusei_binran> ページ下部の「屋外銅像・記念碑、名木等〔上野キャンパス〕」参照。ただし2018年以降の記念物の移設等の状況は反映されていない。

³¹ 廣群鶴とは江戸時代より続く石工の家系で、本碑石の鐫刻を担当したのは8世廣群鶴(本名・元橋染太郎)。当時寛永寺墓地下谷区谷中町に店を構えていた。なお大正6年の「狩野芳崖翁碑」にも「廣群鶴刻」の銘がある。加藤勝丕「御碑銘彫刻師広群鶴のこと」『Museum』547号, 1997.4。

³² 『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇』第3巻pp.27-36に転載。

った狩野芳崖筆<仁王捉鬼>(原画は東京国立近代美術館所蔵)を掲載し【図1】、口絵には碑石拓本【図2】と滋賀県園城寺法明院にある墓と埋葬筐の写真を掲載する。

同誌によれば、当日は本館美術部玄関前に建立の成った碑前に壇を設けて遺著『東亜美術史綱』の翻訳原稿を供え、大天幕2つを張って式場及び来賓席とし【図3】、発起人・美術学校関係者・帝国美術院・帝展審査員・卒業生・新聞記者等200人を集める盛況ぶりであった。除幕式、法要に次いで、校長正木直彦をはじめ大村西崖や濱尾新ら関係者により悼辞が述べられた。式典後は校内会議室で茶菓の饗応があり、室内に故人の肖像を祀り捧物を供え、故人の著述及び関係深い図書を陳列した。その後、上野精養軒にて夜半まで記念晩餐会が開催された。

発起人代表であり、『東亜美術史綱』の翻訳者である有賀長雄による同号「開会の辞および報告」には、建碑までの経緯が詳述されている。すなわち、フェノロサがロンドンで客死した明治41年(1908)³³に、日本で行われた追悼式の余剰金300円で胸像製作と遺著出版を行う話が持ち上がったが、未亡人から遺骨の日本への改葬の希望があり、東京美術学校、東京大学、山中商会等の協力で翌年園城寺境内に墓所を構えることができた。その後、遺著の翻訳事業を進めるうち、大正7年(1918)頃になり、フェノロサ13回忌を機に碑文を建立する計画が起こった。前年に狩野芳崖の没後30年祭において谷中長安寺に碑文を建設したことを受け、岡倉秋水が勧めたことがきっかけであったという。

さらに同号巻末「フェノロサ記念会会務報告」および「フェノロサ記念会会計報告」をあわせて参照すると、事業は以下のような要領で進められた。

大正8年11月27日、美術学校倶楽部³⁴で第1回相談会を開催。後に「フェノロサ氏記念会」と改称し林愛作、大村西崖、小林文七を幹事とする。

大正9年5月3日、撰文を井上、書を西崖が担当すること、法要を同年9月21日とし、建碑と遺著翻訳を同日までに完成することを決定。7月3日には岡倉幹旋の根府川石を使用すること、画像を長原孝太郎に依頼すること、法会は上野寛永寺に依頼すること、予算を2500円とし寄付金を以て充てること等が取り決められた。

寄付集め、碑石制作、設置と事業は進み、同年9月21日に序幕式典を挙行。同年10月11日の収支の総決算を以て会務を締め括った。

発起人は最終的に100人を超え、寄附の総収入金が3820円、総支出金3452円70銭、残高367円30銭であった³⁵。このうち支出の内訳は

碑建設碑 1203円75銭(石工廣群鶴へ支払)

(碑石根府川石480円、台石300円、碑文並肖像彫刻料311円75銭、運搬据附費112円)

9月21日建碑除幕諸費 464円78銭(精養軒支払、式場装飾設備諸費、当日事務関係者、使傭人等へ支払)

法要費 464円78銭(寛永寺へ134円、三井寺へ298円60銭)

碑拓本百枚代 300円

発起人幹事等集会費 24円80銭

報酬手当 340円(肖像揮毫、東亜美術史綱翻訳謄写、会事務取扱者、速記者等へ報酬手当)

通信逋送諸費 26円62銭(郵便切手、葉書購入代、書留料、小包料電話料)

印刷費 87円60銭(拓本木縮刷刷500枚、寄付募集状、招待状等)

³³ フェノロサの死去と追悼会については『百年史 美術学校篇』第2巻pp430-436参照。

³⁴ フェノロサが師事した園城寺住職・桜井敬徳のため、小石川にビゲローが建てた「円密道場」を美校に移築した建物。『百年史 美術学校篇』第1巻p.222。

³⁵ 資料原本では漢数字が用いられるが、読みやすさを考慮して金額については洋数字に変換している。以下同じ。

諸雑費 62円55銭

寄付の内返還金 600円(決算に際し多く余剰金を生ぜしに付最初多額の寄付を致されし団琢磨氏へ三百円、早川千吉郎、原六郎、原富太郎三氏へ各百円宛 返還したり)

と、詳細にわたる報告がなされている。当初立てた予算の2500円を大きく上回る支出金額となり、寄付金が不足したため除幕式典後にも督促の書面を送付し、結果全ての支払い完了後に余剰金を生じたため、高額寄付者に返還したことなども詳述される。

『金品寄付ニ関スル書類』

以上の『校友会月報』の記録に関連して、碑石の寄贈先となった東京美術学校側の一次資料がGACMAに所蔵されている。『金品寄付ニ関スル書類』は美校庶務係が学校への金品寄付に関する書類をおおよそ年代順に綴じた8冊の簿冊で、多くの学内資料を失った明治44年の美術学校火災の後から昭和20年までの書類を所収する³⁶。【図4】

全内容の精査は完了していないが、各冊冒頭に付された目録を概観すると、年代ごとに収載基準に変遷があるように見受けられる。

すなわち、明治44年から大正時代初期までは、年表・年鑑類、書籍目録、省庁職員録、各都道府県の統計資料等が目立っており、火災後に欠乏した事務資料の再収集という背景が想定される。大正6年頃になると美術や書画に関する書籍や図録が増え始め、台湾や朝鮮の関連書籍や報告書類も散見する。昭和期に入ると美術工芸の作品や参考品、美術や学術に関する書籍や写真など、教育研究に直接関わる資料が大半となる。

顕彰記念物の寄贈は昭和時代に入ってから本資料に登場することが増え、大村西崖銅像、白山松哉銅像(昭和4年)、白濱徹銅像(同6年)、岡倉天心銅像、黒田清輝銅像(同7年)、高村光雲銅像、正木記念館(同10年)、久米桂一郎銅像(同11年)、正木直彦陶像(同12年)等々が確認できる³⁷。

美校関係者の記念物はまず関係者の間で建造の建議が起こり、有志の会が組織されて寄付金を募り、制作者を選定し、建造と設置が完了し、最終的に美術学校へ寄贈する、という経過を辿るのが通例であった。『金品寄付ニ関スル書類』に収載されるのはこの寄贈に関わる記録である。大正9年の本碑石関係資料はその早い例であり、『校友会月報』での報告の詳細さとあいまって、この種の事業の代表的事例とみなされる。

『金品寄付ニ関スル書類』に見る「斐諾洛薩先生碑」

本碑石に関連する資料は、『金品寄付ニ関スル書類 自大正9年至大正12年』の巻頭目録24番に「故フェノロサ氏碑 外附属書類付 壹基」(寄贈者フェノロサ氏記念会発起人総代、大正9年9月27日付)、目録25番に「フェノロサ氏石碑全面拓本 壹枚 附縮写摺本 壹枚」(寄贈者同じ、同年10月5日付)の2種が収録される³⁸【図4】

³⁶ 『金品寄付ニ関スル書類 自明治44年至大正2年』、『同 自大正3年至大正5年』、『同 自大正6年至大正8年』、『同 自大正9年至大正12年』、『同 自大正13年至大正15年』、『同 自昭和2年至昭和3年』、『同 自昭和4年至昭和5年』、『同 自昭和6年至全(最後の所収資料は確認できた範囲で昭和20年2月)』の8冊。

³⁷ ただし年代の遡る明治～大正時代前期に制作寄贈された教員銅像、例えば加納夏雄(明治43年)、川端玉章(同44年)、橋本雅邦(大正2年)等は、現在のところ本資料の中に記録が確認されず疑問が残る。加納夏雄については火災以前の寄贈なので、記録が焼失した可能性もある。その他の事例については、手続き年代の混乱等による未発見・見落としか、年代による収載方針の変化など何らかの理由によりもともと採録されなかったのか、引き続き調査しつつ現段階で判断は保留したい。

³⁸ 資料25番の寄付内容として「フェノロサ氏石碑全面拓本 壹枚 附縮写摺本 壹枚」「米国人ヘンリ

目録24番「故フェノロサ氏碑 外附属書類付 壺基」の主な内訳は以下の通りである³⁹。

- ①「碑石建立寄附并起工許可願」(故フェノロサ氏記念会発起人総代有賀長雄より美術学校校長へ、大正9年7月10日付)
- ②「案 寄付受領ニ付伺」(文部省への碑石建設と受領への伺い、大正9年7月13日発送)
- ③「文部省認可書」(②に対する許可書、同年8月13日付)
- ④「寄付願許可案」(①に対する許可および設置場所を「本校々舎前面西北方」に指定、同年8月21日発送)
- ⑤寄付碑石建設竣工届(発起人総代有賀より学校長へ、同年9月21日付)
- ⑥「礼状案」(⑤への礼状、同年9月27日発送)
- ⑦「文部省へ届案」(碑石受領の届、「寄付碑石建設竣工届」「碑石建設要項」等を添付、同年9月27日付)

大正9年7月9日に寄贈者から学校へ碑石の寄付と起工の許可申請があり、これを受けて学校から文部省に寄付受領の伺いを出し、除幕式当日の9月21日に建設竣工届を提出、これに対し学校から寄付受領の礼状の発送、さらに寄付受領の届を学校から文部省に提出と、一連の手続きを順を追って確認することができる。

さらに⑦に添付される「碑石建設要項」【図5】では、碑の概要とあわせて以下のように碑石の彫刻と建設工事の費用と日程を記す。

- 一 碑身石(根府川石、長一丈壺尺巾最広四尺余)及台石ニ要セシ費用 金780円
- 一 肖像揮毫報酬 金100円 但撰文并文字揮毫ハ無報酬トス
- 一 鐫刻料、建設工事費用其他雑費 金423円75銭
- 一 鐫刻彫刻経過
大正九年八月十日ヨリ着手全年九月十五日竣工
- 一 建設工事経過
大正九年九月十七日ヨリ着手全月十九日竣工

以上は上述の『校友会月報』巻末「フェノロサ記念会会務報告」において、

「同年同月(大正9年7月)10日 本日発起人総代有賀氏の署名を以て、『フェノロサ』氏の碑石建立寄付並起工許可願を東京美術学校長に差出したり、之に対し8月21日附を以て同校長より許可の指令ありたり」

「同年同月(大正9年9月)19日 碑石の鐫刻は下谷区谷中町一番地廣群鶴に依嘱し、8月10日より着手し9月15日に竣工し、直に17日より美術学校校庭の敷地に運搬し来り建設に従事し、本日全く竣成せり」

「同年同月(大正9年9月)21日(略)本日、碑石建設竣工届を学校に寄附するの手續を了したり」

一ピー武威氏筆フェノロサ氏追悼文並ニ書 四枚)の2種が記載されており、後者に朱で取り消し線が引かれている。後者の追悼文と書は、上記『校友会月報』掲載の、式典後、校内会議室で行われた茶菓の饗応の場の陳列品のうち「一、フェノロサ氏に就て英文 壺通」「一、追悼発句及書 参通」に相当するものと思われる。『東京美術学校校友会月報』第9巻第1号(大正9年10月)、p169、『百年史 美術学校篇』第3巻、p33。当初碑文拓本とともに寄贈品の候補となり、その後なんらかの理由で寄贈が取り消されたものと見られる。

³⁹ ただし綴じの順は必ずしも①～⑦の通りではなく、ここでは筆者が日付順に並べ変え番号を振った。

と報告される日付と一致し、『校友会月報』に掲載された会務・会計報告を一次資料により裏付ける。さらに本資料には、印刷物に載らない寄贈者と学校、学校と文部省とのやりとりが保存されている点でも貴重である。碑石建立はあくまでも有志による顕彰事業であるが、学校の敷地を恒久的に使用し、完成品は学校へ寄贈されることから、学校を通した文部省への報告が不可欠だった事情がこれにより確認される。

会計に関しても同様で、碑石および台石の石材780円と、鐫刻料および建設工事費用其他雑費423円75銭は、『校友会月報』巻末「会計報告」の「碑建設碑 1203円75銭(石工廣群鶴へ支払)」とある金額に一致し、ここで外部業者である廣群鶴への支払額と内訳が再確認できる。

また肖像の原画の作者長原孝太郎には報酬金100円が支払われたのに対し、撰文および文字揮毫を担当した井上哲次郎と大村西崖は無報酬であったことが明らかだが、井上は東京大学でフェノロサの教え子、西崖は主催者の一員と、いわば発起人会の身内の立場であったことが関係しているだろう。

むすびにかえて

東京美術学校における顕彰記念物の建設事業は、功績のあった先人の事績を称え、その誉を碑石や銅像のかたちで永続的に顕示しようとする行為であり、携わる人々の思考や行動、人間関係を浮かび上がらせる魅力的な題材である。本稿で取り上げた『金品寄付ニ関スル書類』は刊行物の記録を補い、事業の推移や金銭の流れを具体的に裏付ける。幸い同時代の証言が残るケースも多く、大学史史料と対照できる有意義な事例であると思われる。

本資料には展示で扱った「岡倉天心記念像と六角堂」、「正木記念館と正木直彦寿像」のほか、構内に点在する旧教員の銅像等多くの記念物に関わる一次資料を含む。これらの各事業の詳細については本稿では割愛したが、引き続き整理と調査を進めていきたい。

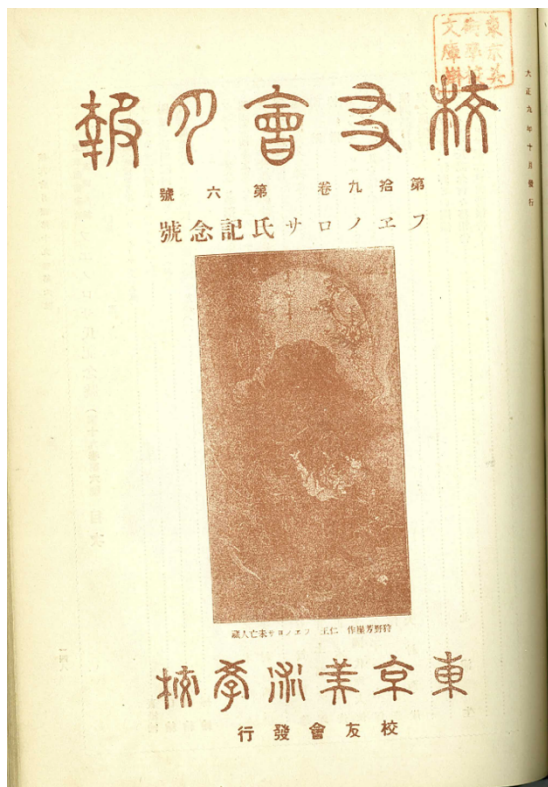


図1 『東京美術学校校友会月報 フェノロサ氏記念号』第19巻第6号(1910. 10)表紙

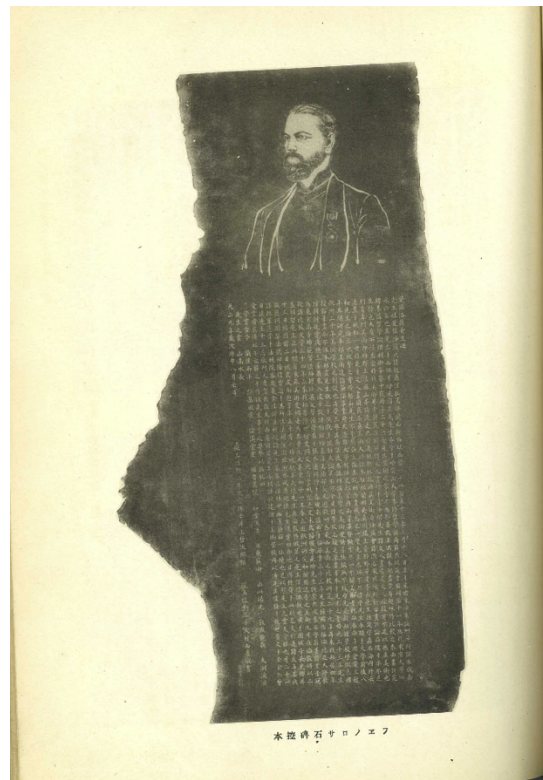


図2 同口絵 フェノロサ石碑拓本



図3 同挿図 建碑除幕式の様子

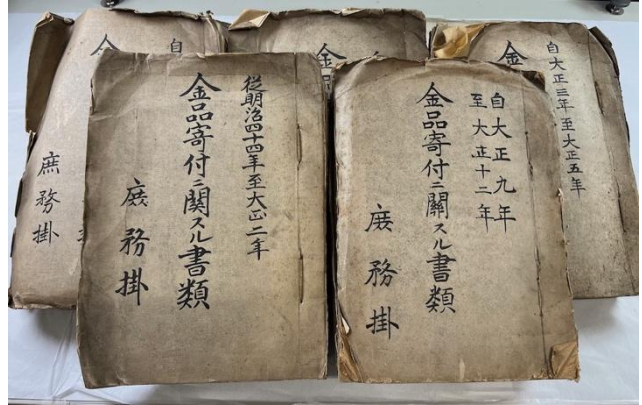


図4 『金品寄付ニ関スル書類』8冊
GACMA所蔵

二一	大正九年八月十日	宮内省圖書寮 皇室略牒	志冊
二二	大正九年九月十日	東洋圖書館 洋書目録	志冊
二三	大正九年九月十四日	香取秀真 妙山陰謀求利	志冊
二四	大正十年一月五日	故工部省口内氏碑	外附属書類
二五	大正十年一月五日	公立石碑全面拓本	附属書類
二六	大正十年一月七日	華畫會書	華畫展覧會書目録
二七	大正十年一月廿七日	元帥寺内伯爵遺傳	志冊
二八	大正十年一月廿七日	七條 愷	志冊
二九	大正十年一月廿七日	社會問題の改造的解釈	志冊
三〇	大正十年一月廿七日	大村西崖 論書畫百絶	志冊
三一	大正十年一月廿七日	國勢院 日本帝國人口動態統計	志冊
三二	大正十年一月廿七日	高村光雲 鷗道物産遺物写真	二枚宛
三三	大正十年一月廿七日	増田捨松 泰山四年案内詳図説明	二枚宛
三四	大正十年一月廿七日	文部省 美文才四五回学年報	志冊
三五	大正十年一月廿七日	東京帝國大学	志冊
三六	大正十年一月廿七日	東京帝國大学	志冊

図5 『金品寄付ニ関スル書類 自大正9年至大正12年』巻頭目録 (24、25がフェノロサ碑関係)
GACMA所蔵

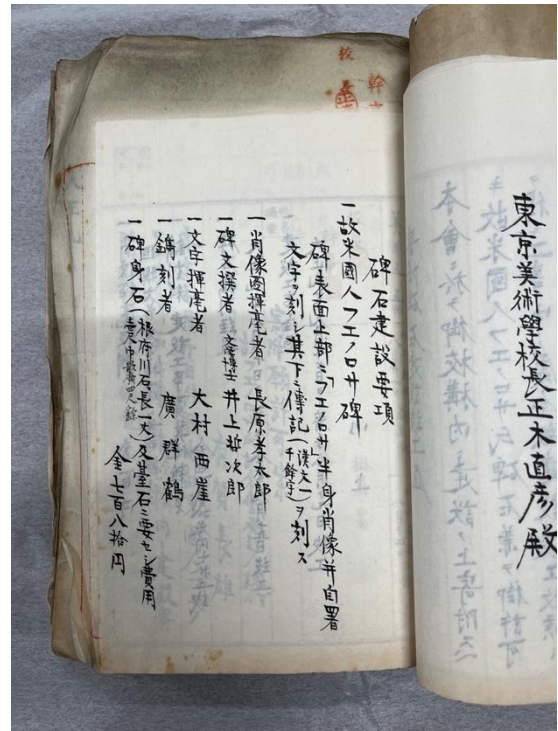
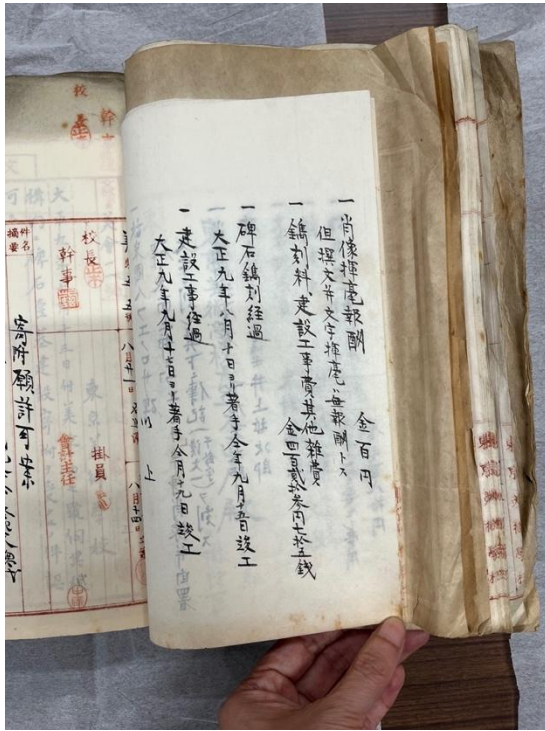


図6 『金品寄付ニ関スル書類 自大正9年至大正12年』 「碑石建設要項」 (右)1頁目(左)2頁目
GACMA所蔵

東京藝術大学美術学部 近現代美術史・大学史研究センター年報・紀要
令和4年度(2022)

編集・発行 東京藝術大学美術学部 近現代美術史・大学史研究センター
発行日 2023年8月31日

GACMA: GEIDAI Archives Center of Modern Art
110-8714 東京都台東区上野公園12-8
<https://gacma.geidai.ac.jp/>